

しゅんちゃんのお雨の日

川崎 徳子

朝、雨が降っていると、なんとなくお天気の良い日に比べると気分が晴れない気がします。外がどんより暗いからなのか、雨の音が耳に響くからなのか、それとも太陽の光が感じられないからか、動きが制約されてしまうからなのか、どこかそんな気分

になっていく気がします。「雨の日だって楽しもう」とか「雨の日も好き」ということも、保育者である私は考えてはみるのだけれど、やはり、雨の日の霏霏を味わうには、少し気持ちの切り替えが必要で、いつの頃からか「雨の日」というイメージが自

分の中に大きくできてしまっているようだなとも思えます。それは、雨の日を感じていることでもあるけれど、本当はもっと楽しめる雨の日を少しつまらなくしているのかもしれない。

この年は四歳児の担任でした。私の勤めている園では、三歳から進級する子どもと四歳で入園している子どもが一緒になって四歳児のクラスになります。その子どもたちが新しい友達や生活にも少し慣れてきて、自分なりに好きな遊びを見つけて動ける

よくなる頃、季節はいいタイミング(?)で梅雨を迎えます。ちょっと気に入った遊具やウサギ小屋、保育室周辺の庭を回って花を摘んだりダンゴムシを見つけたり、砂場の周りでままごとをしたりなど、自分なりに、あるいは保育者の側で、したいことを見つけて過ごすようになっていくのに、雨の日が続くとそれが思うようにいなくなってしまう。

それだけでなくまだまだぶつかることの多い子どもたちです。雨が降ると外に出られないものだから、保育室に居る子どもの数も多くなり、ぶつからなくても良いところでぶつかったり引つかからなくていいところで引つかかってしまいます。そのため、喧嘩が起こったり悲しい思いをすることも増えたりしてしまふのではないかと、そんなことが雨の日の保育の心配事として浮かんできます。そういう思いを巡らせながらも、なんとか楽しく過ごせるように、保育者は環境を考えていくのです……。

でも、ふと目の前の子どもたちの姿を追ってみる

と、いろいろなお天気の日や園の環境、そして、毎日の生活をそれぞれに受け入れて自分なりに過ごしていくようになっていく様子が見えてきました。そして、感動しています。そんな雨の日を巡る子どもたちの姿からいくつか書いてみました。

雨の日の過ごし方 その1

園庭の乗り物に、三輪車があります。小さい三輪車、少し大きい三輪車、色違いのものや二人乗りのもの、つながるものなど、いくつか種類があるのですが、その中でも特にどの年齢の子どもにも人気のある赤い三輪車があります。確かに、私が乗ってみても一番ペダルとタイヤの関係がいい感じで、ペダルを踏み込むと力がうまくタイヤに伝わって適度にスピードもでるし、漕いでいて何よりも爽快です。四歳児のようちゃんも一学期の頃は、とにかく朝来るとそれを探して乗ることが続きました。

そんな頃の雨の日。小降りだけれど雨粒が落ちて

いたのに、ふと私が裏庭を見ると、ようちゃんが赤い自転車に乗っていました。何か感じながらゆっくりペダルを踏みしめて……。見ている私には気づいていなかったのだけど、「ようちゃん濡れるから、雨ひどくなったら入っておいで」と声を掛けると、じっと私を見つめた後、だまっただまま、またペダルを踏んで広い庭の方に進んでいきました。暫くすると、ちよつと雨がひどくなってきたので、気になって外を見ると、赤い三輪車は裏庭に乗り捨ててあり、ようちゃんは、保育室で絵本を見ていました。

この頃のようにちゃんにとって、三輪車は、幼稚園ですることの一つであって、ルーティーンという程のものになっていたわけではないのかもしれないけれど、ようちゃんその日のリズムをつくるものになっていたのかもしれない。それは雨が降っていても、したいことの一つであることには変わりはない、やはり乗らずにはいられなかったのだと思えます。でも、雨がひどくなると、きつと何か感じて、

乗り続けなくて部屋に入ってきたのだろうとも思いますが。大雨だったらもう少し声を掛けたかなと思うけれど、保育室で絵本を見ているようちゃんを見ると、そつとしておいてもいいかなと思いました。

雨の日の過ごし方 その2

私の居る園は、保育室が中庭を囲んでいるような構造になっているので、少しの雨なら砂場のある中庭でも遊べるように稼働式のテントを出します。でも大雨になるとそれもできない。それでも、子どもたちは、雨の日も園庭のあちらこちらにある雨を避けられる場所をしつかりと知っていて、傘をさしたりカッパを着たりして出かけていきます。必ず出かけているところが、赤い汽車と客車の遊具。中に入るので、少しの雨でもままごとやごっこが出来ます。汽車の入り口には、ちゃんと傘がたたんでおいてあるのもすてきな風景。

もう一つは、園庭でもちよつと離れたところにあ

るアスレチックの三角の塔の下。ここは、雨が完全に避けられるわけではないけれど、家のイメージがもてるのでしよう。雨でもままごことをしたい子どもは、せつせと鍋や皿を運んでやっています。

それから、築山に埋めてある土管の中。土管は二つあるのですが、その中にも二、三人から多いときは四、五人の子どもたちが居ます。ここは、夏は涼しくて、土管のカーブにもたれかかるとお昼寝もできるくらいいい感じ。友達とそつと頭を寄せ合ったり体をくつつけたりしておしゃべりしている姿もほほえましく、日よけにも雨よけにも、居場所にもなるみたいです。

さすがにどしゃぶりだと、どの場所も空っぽになるけれど、雨でも楽しめる場所をちゃんと子どもたちは見つけて過ごしています。

雨の日の過ごし方 その3

保育室の前のテラスの屋根から、雨の日は雫が落

ちてきます。子どもたちもはじめのうちには、じつと眺めているけれど、そのうち手で触って、いつの間にか頭も濡らして、雨シャワーに。友達とキヤーキヤーはしゃいでいる声を聞きつけて、「風邪ひいちゃうよ」と声を掛

ける私。どうしても、最後はこうなってしまう。タオルで頭を拭きながら、目が合うその表情からは、「わかつてるよ」って、伝えられてる気がするけれど、どうかしら？ こんなことは毎年繰り返されます。

そんな側では、雨の雫からか、水たまりからか、足洗いの桶にたまっている水を見たからか、色水を始める子どもたち。水が何を連想させたのでしょうか？「お部屋には、その色水持って入らないでね」と伝えながらテラスに机を出して場をつくる私。雨の日にも水遊び、雨の日だから水遊びなのかなとふと思います。



雨は濡れることばかりでもありません。四歳児は、自分のロッカーに個人持ちで粘土を持っていくのですが、雨が降ると自分の粘土と粘土板を持ち出して始める子どもたちもいます。一人二人が始めると、いつの間にか何人かと一緒に楽しんでいきます。

そして、その向こう側では、思い出したように棚の上の籠にしまっていた楽器を取り出してきて、「ねえ、先生曲かけて」という子どもたち。さっそくCDデッキを出して場をつくります。すると、それぞれが思い思いの楽器を手に、曲に合わせて大合奏に大合奏。いつの間にか人数も増えています。雨の日でみんなが側にいることで思いついたり思い出したりする遊びや広がる活動もあるなと思います。

そして、最後は、しゅんちゃんの日

四歳の四月、他の園から入園してきたしゅんちゃんは、お母さんが出産を控えていて入園当初から休みも多く、なかなか園の生活にも慣れないでいまし

た。毎日どんな風に過ごしているかわからず、ひとつひとつ私に「これはこうしていいか？ どうするか？」と確かめて過ごすことが続いていました。そうした中でも生き物にはとても興味があって、保育者と一緒に飼育ケースを持って外へ出かけることが楽しみになっていました。登園すると、すぐに虫捕りに出かけるようになっていました。私は子どもたちの朝の受け止めをしていて、すぐにしゅんちゃんの子供捕りについて行けないことも多かったのですが、そのときは副担任のN先生を誘って出かけたり、そのうち、朝シールを貼るとすぐに、「外に行っていいか？」と私に声を掛け、自分だけでも出かけたりにするようになってきました。その頃は、園庭にはバッタやテントウムシがたくさんいて、いつの間にか生き物の好きな友達二、三人と一緒にあって一日中園庭を探し回り、飼育ケースにいっぱい虫を捕まえて帰ってくるようになりました。

そんな頃のある日。その日は、雨がザーザー降っ

ていました。いつものようにしゅんちゃん、飼育ケースを持って、お出かけの準備。カッパもしっかり着ています。「しゅんちゃん、雨、降ってるよ」と私が声を掛けると、「カッパ着ていけばいいじゃん」とあっさり返事を返し、雨の中を出かけて行きました。雨だから特別という訳ではなく、いつもと変わらないという顔でした。そして、今日もいっぱい虫を捕まえてくると言っているようにも見えました。声を掛けた私の中には、「濡れるよ」という気持ちと同時に、雨の日だからいつものように虫はいないと思うけど……という気持ちが無意識に含まれていたのかなと思うのですが、こうもあっさりしゅんちゃんに返されてしまったことで、私自身、何かちょっと恥ずかしいような気持ちになりました。そして、その日のしゅんちゃんは、いつものように虫をどっさり捕まえてはいなかったけれど、その代わりにカタツムリを一匹飼育ケースに入れて帰ってきました。「カタツムリがおった」と、それ

で十分満足そうでした。

そんな調子で雨の日も関係なく飼育ケースを持って出かけていたしゅんちゃんの毎日も、気がつくど、いつしか無くなっていました。朝から手には広告で作った剣を持ち、カラービニール袋のマントを着けているしゅんちゃん。いつの間にか生き物から始まった幼稚園での生活が、好きなキャラクターになりきって友達と一緒に過ごすことへ移っていたのです。

四歳の生活を随分と過ごした一月のある雨の日の朝。久しぶりにカッパを着て飼育ケースを持って出かけようとしているしゅんちゃんを見かけました。私に気がついたしゅんちゃんは、「ちよつとカタツムリ捕ってくるけー」と、一人で雨の中に出かけて行きました。そして、片付けの頃、「メダカ捕ってきた」と見せてくれた飼育ケースの中には、赤いボウフラがフニョフニョ泳いでいました。「先生、これ飼うからここに置いちよくね」。

雨の日に「カタツムリを捕ってくる」と言って飼育ケースを持って出かけたことも、始めの頃のしゅんちゃんからすると変わってきているのですが……。きつと散々園庭を回ったことでしょう。もしかしたら、池に行ったのは、アメンボを捕ったときのことを思い出したからかもしれません。この寒い季節には、そんな生き物も普通はいないのですが、しゅんちゃんの熱心な散策は、こんな季節の雨の日でもボウフラという立派な生き物を見つけることに至ったのです！ それはそれで、ステキなこと。また次に雨の日に気づいたら、今度はボウフラ探しに行くのかしら？

雨の日が雨の日になること、雨の日を感じて過ごすこと。四歳児の一年の中で、雨の日を追っても子どもたちの過ごしている世界の広がりを感じます。そして、確実に自分なりに育っていることも。それから、しゅんちゃんの姿を思うと、大人が先に「こ

うなのよ」と言ってしまふよりも子どもたちは、雨の日のことをそのときそのとき感じながら、重ねて過ごしているんだなと思います。もちろん、側にいる大人として、子どもたちに気づいて欲しいことは伝えても、枠のない空間、ほんやりとしていてもとても広い空間の中にいて、いろいろなことを感じている子どもたちの世界は大切にしたいなと思います。そして、私たち大人は、確かさの中にいるように、実は限られた世界で生きてしまっているかもしれないことを自分の中で思い返しながら……。

「ねえ、先生、さつきよりお日さま元気になったね」「そっだね」。

雨あがりには園庭に出かけようと一緒に靴を履き替えながら、こんな風に話せる子どもたちとの生活が今日も続いています。私の中の雨の日も、今年はずう少し違ってくるかもしれません。

(山口大学教育学部附属幼稚園)